

医事・文談 九百四十八 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その236

子規と漱石(四十五たび続)

「子規選集」第14巻『子規の一生』(和田恵司編)は、今年9月20日、静岡県駿東郡長泉町下土狩増進会出版社から刊行され、全15巻がこれで完了した。

この『子規の一生』は、子規のその日、その日の行動、交友、発信、受信、更に関係のある人々の消息まで載せるなど、年譜としては驚くほど詳細を極めたものである。

例えば、より江さんの文にあるヘルメットをどこで買ったかが分かる。それは7月23日(火)神戸病院から須磨保養院へ移るに際し、帽子がなかったたので途中で買ったものである。それを松山でも冠っていたもので、それがより江さんの眼にとまったのである。

ところが、この本には子規とより江さんが、顔を会わせたこと、記述がない。『子規言行録』に載っているのだから、かなり知れ渡ったことだと思ふのであるが、千慮の一失というか、やはり見逃しはあるのである。

なにしてるこの本には、子規が東京にいた明治16年7月から、死去した同35年9月までの「東京天候」が、晴雨、曇、霧、雪、暴風、雷、地震まで、毎日々々の一覧表が載っているくらいに行き届いた調査もある。

また苦痛をまぎらすため麻痺剤服用の時間も刻明に記載されている。折角の労作に、子規とより江さんとの接触の事実の記載が脱落しているの、調べた範囲でより江さんの生涯と人物と作品について記述しようと思ふ。

子規の短歌の愛弟子・長塚 節は喉頭結核(のみではなく、重症の肺結核にも罹っていた)と診断されていたので、当時耳鼻科の第一人者と目されていた久保猪之吉教授の診療を受けるために、九州方面旅行の途に上った。

それは大正元年のことで、福岡の前にも、京都

帝大附属病院に入院したり、そのほかにも東京でいくつかの病院に入院加療している。

喉頭結核と初めて診断されたのは明治44年(一九一三)10月のことで、同年8月頃から唾液を嚥む毎に咽喉に痛みを覚え、郷里・茨城県結城郡岡田村に近い下妻町(現市)の耳鼻咽喉科医・中島医師の診を受け、喉頭結核と告げられたのである。

そこで驚いて上京、二、三の医師の診を受け、結局、東大教授・岡田和一郎によつて手術が行われた。

その頃、胸の方は「肺にも僅かながら故障のもの」の由、只此は熱もなく盗汗もなく、只今の所身体は虚弱と申しながら従来と異なることなく、一日六、七里の道を行くに苦しからず候」と友人宛の書簡に書く。

この文の如く、節は旅行を好み、当時、鉄道も敷設本数は少く、バス路線もなく、徒歩によつて関東から九州、対馬にまでおよぶ旅行をしている。節は久保教授の診を乞うために、九州に向かうに当たり、夏目漱石に紹介状を書いてもらった。以下「漱石全集」書簡集 四による。原文は句読点がないが、読みやすいように、それを施した。

拜啓時下余寒猶烈敷候処、愈御清適奉賀候。却説小生知人に長塚節と申す歌人有之、子規と根岸短歌会杯にて研究致し、其後は小説杯に興味を持ち、現に一昨年は東京朝日紙上に「土」と申す長篇小説を載せ候男に候。此人不幸にして喉頭結核を患ひ、岡田博士の治療を受け、先頃退院致し候処、今度思ひ立ち明日より九州地方漫遊の途に上り候に就いては、自然御地へも参るべくにつき是非共貴所の診察を受け度希望の由にて、小生に紹介を依頼致し候。小生も知人の事にて、甚だ気の毒に存じ未だ御懇談も致したる事なき字兄に對し、失礼とは存じ候へども思ひ切つて引受此書面を認むる事と致し候。何卒事情御諒察の上右長塚節氏御地へ参り候節は、一応御診察の上相当の御注意御与被下候へば難有候。先は右御願迄。匆々敬具

三月十七日

夏目金之助

久保 猪之吉様

(表紙写真)

早朝の舞

旭川市医師会 梨木 寛

日の出と共に飛来した丹頂が舞を始める、広げた風切羽と吐く息が黄色に染まる、わずかな時間だがきれいだ。やがて厳寒期になると外気

より暖かい川の中にいることが長くなり、給餌場に飛来するのが遅くなり黄色に輝く羽は見られない。